修士論文（要旨）
2022 年 1 月

いじめ体験と自己成長との関連について
―ソーシャルサポートとレジリエンスと自尊感情に着目して―

指導　山口　一　教授

心理学研究科
臨床心理学専攻
220J4001
秋山　瑳里奈

Master's Thesis(Abstract)
January 2022

The Relationship between Experiences of Bullying and Self Growth: Focus on Social Support, Resilience and Self-esteem

Sarina Akiyama
220J4001
Master's Program in Clinical Psychology
Graduate School of Psychology
J. F. Oberlin University
Thesis Supervisor: Hajime Yamaguchi

目次

第１章　問題の背景と所在
1.1　いじめ体験の経験の割合，いじめ体験の時期・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１
1.2　いじめの背景，役割分類・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１
1.3　いじめ被害の否定的影響と肯定的な影響・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１
1.4　いじめの回復過程・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２
1.5　ソーシャルポートの重要性・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３
1.6　レジリエンス・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３
1.7　自尊感情・・・４
第２章　目的と研究意義
2.1　目的・・・４
2.2　研究意義・・・４
第３章　方法
3.1　調査対象者・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５
3.2　調査方法・・５
3.3　質問紙・・・５
3.4　倫理的配慮・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６
3.5　分析方法・・７
第４章　予想される結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７
第５章　結果
5.1　基礎統計量・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・９
5.2　因子分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０
5.3　いじめられたことがある群，いじめられたことはないがいじめをみたことがある群の
差・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０
5.4　各尺度の関連・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１６
5.5　各尺度の影響・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２３
第６章　考察
6.1　各群の度数分布・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２７
6.2　因子分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２７
6.3　いじめられたことがある群，いじめられたことはないがいじめをみたことがある群の
差・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２８
6.4　各尺度関連・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２９
6.5　いじめ体験の自尊感情や自己成長への影響・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３１
第７章　総合考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３３
第８章　謝辞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３６
引用文献・・・Ⅰ
資料

第１章　問題の背景と所在

いじめ防止対策推進法では，いじめを「児童生徒に対して，当該児童生徒が在籍する学校に在籍している等当該児童生徒と一定の人的関係のある他の児童生徒が行う心理的又は物理的な影響を与える行為であって，当該行為の対象となった児童生徒が心身の苦痛を感じているもの」と定義した(文部科学省，2013)。

坂西(1995)，香取(1999)は，いじめ被害体験者はいじめを受けてから長期間を経た後でも心理的・身体的にネガティブな影響を受ける可能性があることを明らかにしている。一方で，いじめ被害経験が必ずしも悪影響だけを与えるわけではなく，「他者尊重」や「精神的強さ」等の肯定的な影響を与えることが明らかになっており，いじめ被害体験と被害者のその後の適応状態との間を媒介する変数の存在が強く指摘されている。

亀田・相良(2011)は，いじめられた体験を通して自己成長感を自覚している群では，自己開示からソーシャルサポートを得ており，支えてくれる重要な他者の存在があることを示唆した。他にも，積極的な対処法，肯定的意味づけ，ポジティブ思考が自己成長感と関連していることを示唆した。

亀田・相良(2011)，橋本(2012)は，状況を捉えることや深く考える等の個人の持つレジリエンスは，いじめ被害からの回復に関連していることを示唆した。

近藤(2012)は，トラウマを抱えている場合，基本的自尊感情を育むことが心的外傷後成長を支えるためには重要であると示唆した。

第２章　目的と研究意義

本研究では，大学生を対象に，いじめ体験の立場を分類していじめ影響が自己成長に繋がる過程について検討を行うことを目的とする。

Roth el al，(2002)は，いじめを受けることで社会的状況を回避するようになり，社会スキルの学習や実践の機会の減少という事態を招くことを示唆した(荒木，2005)。社会に出る前の大学生の時期において，過去のいじめ体験を自己成長に発展させることに関連する要因を明らかにすることは有意義であると考えられる。この研究の成果は，過去のいじめ体験を肯定的な自己成長に結びつける方法の開発につながると期待される。

第３章　方法

3.1　調査対象者

A 大学に所属している 18～24 歳の大学生男女約 300～350 名程度とする。

3.2　調査方法

調査は，研究担当者が調査協力を承諾くださった先生方の授業終了時に，倫理的配慮を説明した後，Web 形式の「調査票」の URL および QR コードが記載された「調査協力のお願い」から読み取ってもらい，無記名で回答してもらった。

3.3　質問紙

調査方法として，質問紙調査を実施した。質問紙の内容は以下である。

（１）対象者に関する(年齢，性別，学年)について問う項目

（２）いじめられたことがあるかない/いじめを見たことがあるかないかについて問う項目

（３）いじめに遭遇した時期について問う項目(複数回答可)

小学生のとき・中学生のとき・高校生のときかを問うこととした。

（４）いじめ影響

香取(1999)によるいじめ影響尺度を使用した。いじめ影響尺度は，情緒的不適応，他者尊重，同調傾向，他者評価への過敏，精神的強さ，進路選択への影響の６因子からなる。本研究は，いじめを受けた，見た体験直後の影響を考えるために，精神的強さ，進路選択への影響は直後の影響ではないため除外し，情緒的不適応 7 項目，他者尊重 7 項目，同調傾向 5 項目，他者評価への過敏 5 項目の４因子全 24 項目を採用した。４件法で行った。

（５）大学生用ソーシャルサポート

片受・大貫(2014)による大学生用ソーシャルサポート尺度 23 項目を使用した。本尺度は，評価的サポート 10 項目，情報・道具的サポート７項目，情緒・所属的サポート 6 項目の 3 因子からなり，４件法で行った。

（６）レジリエンス

石毛・無藤(2006)による中学生用レジリエンス 19 項目を使用した。今回，大学生にも適応可能な項目内容であったためにこの尺度を使用した。本尺度は，意欲活動性 10 項目，内面共有性 6 項目，楽観性 3 項目の 3 因子からなり，4 件法で行った。

（７）自尊感情

Rosenberg(1965)が作成し Mimura&Griffiths(2007)が邦訳した「Rosenberg 自尊感情尺度」10 項目を使用した。4 件法で行った。

（８）自己成長

Taku, Calhoun, Tedeschi, Gil-Rivas, Kilmer, & Cann. (2007)による PTGI-J:日本語版-外傷後成長尺度 21 項目を使用した。本度は，他者との関係 7 項目，新たな可能性 5 項目，人間としての強さ４項目，精神的変容 2 項目，人生に対する感謝 3 項目の 5 因子からなり，６件法で行った。

3.5　分析方法

いじめられたことがある群といじめられたことはないがいじめをみたことがある群で，質問紙で用いた尺度の値に差があるか t 検定を行って調べた。次にいじめられたことがある群といじめられたことはないがいじめをみたことがある群別に相関分析を行った後，いじめ影響４因子，ソーシャルサポート，レジリエンス２因子を独立変数に，自尊感情を従属変数として，強制投入法による重回帰分析を行った。また，いじめ影響４因子，ソーシャルサポート，レジリエンス２因子，自尊感情を独立変数に，自己成長を従属変数として，強制投入法による重回帰分析を行った。

第 5 章　結果

5.3　いじめられたことがある群，いじめられたことはないがいじめをみたことがある群の差

各尺度と各因子のいじめられたことがある群，いじめられたことはないがいじめをみた

ことがある群との差をみるために，t検定を行った。その結果，いじめ影響尺度に有意差が見られ($t(222)=-4.80, p<.01$)，いじめられたことはないがみたことがある群よりいじめられたことがある群の方が高かった。情緒的不適応に有意差が見られ($t(222)=-6.83, p<.01$)，いじめられたことはないがみたことがある群よりいじめられたことがある群の方が高かった。他者評価への過敏に有意差が見られ($t(222)=-3.04, p<.05$)，いじめられたことはないがみたことがある群よりいじめられたことがある群の方が高かった。

5.4　各尺度の関連

(1) いじめられたことがある群

いじめられたことがある群において，各尺度間に関連があるのかを明らかにするため，各尺度間の相関係数を算出した。

情緒的不適応と同調傾向間において，有意な中程度の正の相関（$r=.51, p<.01$）を示した。情緒的不適応と他者評価への過敏間において，有意な中程度の正の相関（$r=.48, p<.01$）を示した。情緒的不適応と自尊感情間において，有意な弱い負の相関（$r=-.37, p<.01$）を示した。

他者尊重と同調傾向間において，有意な弱い正の相関（$r=.29, p<.01$）を示した。他者尊重と他者評価への過敏間において，有意な弱い正の相関（$r=.36, p<.01$）を示した。他者尊重とソーシャルサポート間において，有意な弱い正の相関（$r=.35, p<.01$）を示した。他者尊重と自己解決間において，有意な中程度の正の相関（$r=.52, p<.01$）を示した。他者尊重と他者のサポート間において，有意な弱い正の相関（$r=.34, p<.01$）を示した。他者尊重と自尊感情間において，有意な弱い正の相関（$r=.29, p<.01$）を示した。他者尊重と自己成長間において，有意な中程度の正の相関（$r=.59, p<.01$）を示した。

同調傾向と他者評価への過敏間において，有意な中程度の正の相関($r=.58, p<.01$)を示した。同調傾向と他者のサポート間において，有意な弱い正の相関（$r=.25, p<.01$）を示した。同調傾向と自尊感情間において，有意な弱い負の相関（$r=-.28, p<.01$）を示した。

他者評価への過敏と他者のサポート間において，有意な弱い正の相関（$r=.38, p<.01$）を示した。他者評価への過敏と自尊感情間において，有意な弱い負の相関（$r=-.21, p<.05$）を示した。

ソーシャルサポートと自己解決間において，有意な中程度の正の相関（$r=.43, p<.01$）を示した。ソーシャルサポートと他者のサポート間において，有意な中程度の正の相関（$r=.49, p<.01$）を示した。ソーシャルサポートと自尊感情間において，有意な弱い正の相関（$r=.22, p<.01$）を示した。ソーシャルサポートと自己成長間において，有意な弱い正の相関（$r=.37, p<.01$）を示した。

自己解決と他者のサポート間において，有意な弱い正の相関（$r=.27, p<.01$）を示した。自己解決と自尊感情間において，有意な中程度の正の相関（$r=.52, p<.01$）を示した。自己解決と自己成長間において，有意な強い正の相関（$r=.70, p<.01$）を示した。

他者のサポートと自己成長間において，有意な弱い正の相関（$r=.34, p<.01$）を示した。

自尊感情と自己成長間において，有意な中程度の正の相関（$r=.48, p<.01$）を示した。

(2) いじめられたことはないがいじめをみたことがある群

いじめられたことはないがいじめをみたことがある群において，各尺度間に関連があるのかを明らかにするため，各尺度間の相関係数を別に算出した。

情緒的不適応と同調傾向間において，有意な中程度の正の相関（r=.41, p<.01）を示した。情緒的不適応と他者評価への過敏間において，有意な中程度の正の相関（r=.43, p<.01）を示した。情緒的不適応とソーシャルサポート間において，有意な弱い負の相関（r=-.26, p<.05）を示した。情緒的不適応と自己解決間において，有意な弱い負の相関（r=-.30, p<.01）を示した。情緒的不適応と他者のサポート間において，有意な弱い負の相関（r=-.22, p<.05）を示した。情緒的不適応と自尊感情間において，有意な中程度の負の相関（r=-.52, p<.01）を示した。

他者尊重と他者評価への過敏間において，有意な弱い正の相関（r=.39, p<.01）を示した。他者尊重とソーシャルサポート間において，有意な弱い正の相関（r=.27, p<.01）を示した。他者尊重と自己解決間において，有意な弱い正の相関（r=.27, p<.01）を示した。他者尊重と自己成長間において，有意な弱い正の相関（r=.29, p<.01）を示した。

同調傾向と他者評価への過敏間において，有意な中程度の正の相関（r=.65, p<.01）を示した。同調傾向と自己解決間において，有意な弱い負の相関（r=-.26, p<.05）を示した。同調傾向と自尊感情間において，有意な中程度の負の相関（r=-.49, p<.01）を示した。同調傾向と自己成長間において，有意な弱い負の相関（r=-.23, p<.05）を示した。

ソーシャルサポートと自己解決間において，有意な中程度の正の相関（r=.55, p<.01）を示した。ソーシャルサポートと他者のサポート間において，有意な中程度の正の相関（r=.53, p<.01）を示した。ソーシャルサポートと自尊感情間において，有意な弱い正の相関（r=.31, p<.01）を示した。ソーシャルサポートと自己成長間において，有意な弱い正の相関（r=.28, p<.01）を示した。

自己解決と他者のサポート間において，有意な中程度の正の相関（r=.48, p<.01）を示した。自己解決と自尊感情間において，有意な中程度の正の相関（r=.49, p<.01）を示した。自己解決と自己成長間において，有意な中程度の正の相関（r=.42, p<.01）を示した。

他者のサポートと自己成長間において，有意な弱い正の相関（r=.23, p<.05）を示した。

自尊感情と自己成長間において，有意な中程度の正の相関（r=.47, p<.01）を示した。

5.5　各尺度の影響

（1）いじめられたことがある群

自尊感情に対する重回帰分析では，情緒的不適応，他者尊重，自己解決から自尊感情に対する標準偏回帰係数(β)が有意である一方で，同調傾向，他者評価への過敏，ソーシャルサポート，他者のサポートから自尊感情に対する標準偏回帰係数は有意ではなかった(Table1)。

自己成長に対する重回帰分析では，他者尊重，同調傾向，自己解決，自尊感情から自己成長に対する標準偏回帰係数(β)が有意である一方で,情緒的不適応,他者評価への過敏,ソーシャルサポート，他者のサポートから自己成長に対する標準偏回帰係数は有意ではなかった(Table2)。

Table1. 自尊感情への重回帰分析

	B	*SE B*	*β*
説明変数			
情緒的不適応	−0.28	0.08	−.31 ***
他者尊重	0.20	0.10	.19 *
同調傾向	−0.09	0.07	−.11
他者評価への過敏	−0.04	0.08	−.05
ソーシャルサポート	−0.02	0.09	−.02
自己解決	0.61	0.12	.45 ***
他者のサポート	−0.09	0.08	−.09
R^2	.44		

基準変数:自尊感情
*p<.05, **p＜.01, ***p＜.001

Table2. 自己成長への重回帰分析

	B	*SE B*	*β*
説明変数			
情緒的不適応	0.09	0.13	.05
他者尊重	0.60	0.15	.29 ***
同調傾向	−0.27	0.12	−.17 *
他者評価への過敏	0.13	0.13	.08
ソーシャルサポート	0.16	0.15	.07
自己解決	1.02	0.21	.39 ***
他者のサポート	0.20	0.13	.11
自尊感情	0.30	0.14	.16 *
R^2	.60		

基準変数:自己成長
*p<.05, **p＜.01, ***p＜.001

(2) いじめられたことはないがいじめをみたことがある群

自尊感情に対する重回帰分析では，情緒的不適応，同調傾向，自己解決から自尊感情に対する標準偏回帰係数(*β*)が有意である一方で，他者尊重，他者評価への過敏，ソーシャルサポート，他者のサポートから自尊感情に対する標準偏回帰係数は有意ではなかった(Table3)。

自己成長に対する重回帰分析では，情緒的不適応，自尊感情から自己成長に対する標準偏回帰係数(*β*)が有意である一方で，他者尊重，同調傾向，他者評価への過敏，ソーシャルサポート，自己解決，他者のサポートから自己成長に対する標準偏回帰係数は有意ではなかった(Table4)。

Table3. 自尊感情への重回帰分析

	B	*SE B*	*β*
説明変数			
情緒的不適応	−0.39	0.11	−.34 **
他者尊重	0.02	0.11	.02
同調傾向	−0.30	0.10	−.33 **
他者評価への過敏	0.11	0.12	.12
ソーシャルサポート	0.10	0.13	.08
自己解決	0.44	0.14	.34 **
他者のサポート	−0.13	0.11	−.12
R^2	.47		

基準変数:自尊感情
*p<.05, **p＜.01, ***p＜.001

Table4. 自己成長への重回帰分析

	B	*SE B*	*β*
説明変数			
情緒的不適応	1.06	0.23	.48 ***
他者尊重	0.23	0.21	.11
同調傾向	−0.36	0.20	−.21
他者評価への過敏	0.17	0.23	.09
ソーシャルサポート	0.17	0.24	.08
自己解決	0.34	0.29	.14
他者のサポート	0.25	0.22	.12
自尊感情	0.99	0.21	.52 ***
R^2	.47		

基準変数:自己成長
*p<.05, **p＜.01, ***p＜.001

第6章　考察

本研究では,大学生を対象に,いじめ影響が自己成長に繋がる過程について検討をした。

各尺度間の影響で注目するべきところは以下の通りである。

1) いじめられた経験がある人は，他者尊重やレジリエンスの自己解決が自尊感情，自己成長に正の影響を及ぼしていることが明らかになった。亀田・相良(2011)は，いじめられた体験から自己成長に至るプロセスにおいて自己開示，ソーシャルサポート，重要な他者の存在，肯定的意味づけ，ポジティブ思考などが自己成長感に至る重要な促進要因であると示唆している。そのため，本研究でもいじめられたことがある群は，いじめの影響を受

けても他者を尊重するような正の影響が働いた場合，自分自身の成長だけではなく，相手を尊重することも含めて成長に向かっていこうとする傾向があると考えられた。一方で，いじめられたことはないがいじめをみたことがある群は他者尊重が自己成長には直接結びつかないことが明らかになった。坂西(1995)は，何をもっていじめと考えるかは，当人の主観によるところが大きいと述べている。つまり，外部の人はからかいだと見る行為であっても，当人が心理的・身体的苦痛を感じ，いじめであると受けとめるなら,それはいじめになると示唆している。そのため，いじめをみたときにその人の認知の違いや，いじめをみた程度や内容によっても変化してくるのではないかと考えられる。また，小塩ら(2002)は，精神的回復力と自尊感情には有意な正の相関がみられることが明らかにしている。そのため，2 群ともレジリエンスの自己解決が高いほど，自尊感情は高くなったのではないだろうか。安田・宮崎(2013)は，いじめという経験や何かしらのショックな出来事が起きてもレジリンスを高めるということは，ストレス耐性を上げることに繋がるということを示唆した。そのため，２つの群においてどの立場であっても自己解決を高めることによって自尊感情が高くなり，それが自己成長に繋がっていくのではないかと考えられる。磯田・西藤・寺嶋(2011)は，困難な状況を成長の機会と肯定的に捉えるだけでなく，実際に行動を統制できると認知していることがレジリエンスに大きく影響していると示唆している。平野(2010)は，問題解決志向，自己理解，他者心理の理解など，獲得的レジリエンス要因を自分の気持ちや考えを把握することによって，ストレス状況をどう改善したいのかという意志をもち,自分と他者の双方の心理への理解を深めながら,その理解を解決につなげ，立ち直っていく力であると示唆された。本研究ではいじめの影響に関しては他者の力を借りるだけではなく自分自身で解決し立ち直ることが成長に繋がっていくのではないかと考えられる。

2）いじめられた経験がある人の場合，情緒的不適応は自己成長には自尊感情を介して負の影響があるという結果が出た一方で,いじめられたことはないがいじめをみた経験がある人は，情緒的不適応は自尊感情に負の影響を持ち，自己成長には正の影響があることが明らかになった点である。いじめをみた経験がある人は，いじめの情緒的不適応の影響を受けながらも自分自身がしっかりとしないといけない,自分自身を頼っていこうという認知から自己成長に発展したのではないかと考えられる。したがって両者では，いじめ影響の受け方に差があった可能性が考えられる。この点は先行研究では，明らかにされていない新しい知見なのではないかと考えられた。

引用文献

荒木剛(2005).いじめ被害体験者の青年期後期におけるリズィリエンス(resilience)に寄与する要因について　パーソナリティ研究, *14*, 54-68.

遠藤由美(2000).「自尊感情」を関係性からとらえ直す　実験社会心理学研究, *39*, 150-167.

福田八重(2006).道徳教育におけるいじめ問題　金城学院大学論集　社会科学編, *2*, 99-110.

藤林沙織・渡邉誠(2020).いじめの回復プロセスに関する一考察　臨床心理発達相談室紀要, *3*, 1-18.

Gini, G., Carli, G., & Pozzoli, T. (2009). Social support, peer victimization, and somatic complaints Journal of Paediatrics and Child Health, *45*, 358-363.

浜本瑞・小林哲郎(2014).　罪悪感と共感性が中学生のいじめ場面への関わり方に与える影響　日本教育心理学会総会発表論文集　第56回総会発表論文集, 769.

橋本綾(2010).　リジリエンシーに関する考察-いじめからの回復の語り-　山梨英和大学心理臨床センター紀要, *8*, 30-37.

八田純子・鈴置央(2015). PTG（外傷後成長）と楽観性に関する一考察　愛知学院大学心身科学部紀要, *11*, 47-56.

菱田一哉・川端徹朗・宋昇勲・辻本悟史・今出有紀子・中村晴信・李美錦・堺千紘・菅野瑶・三島枝里子・島井哲志・西岡伸紀・石川哲也 (2011). いじめの影響とレジリエンシー, ソーシャル・サポート, ライフスキルの関連学校保健研究, *53*, 107-126.

平野真理(2010). レジリエンスの資質的要因・獲得的要因の分類の試み―二次元レジリエンス要因尺度（BRS）の作成　パーソナリティ研究, *19*, 91-106.

Holt, M. K., & Espelage. D. L., (2007). Perceived Social Support among Bullies, Victims, and Bully-Victims. Journal of Youth Adolescence, *36*, 984-994.

磯田佑太朗・西藤奈菜子・寺嶋繁典(2011). レジリエンスの健康回復機能過程に関する研究: 個人内要因との関連性　関西大学臨床心理専門職大学院紀要, *1*, 73-82.

石毛みどり・無藤隆(2005).　中学生における精神的健康とレジリエンスおよびソーシャル・サポートとの関連-受験期の学業場面に注目して-　教育心理学研究, *53*, 356-367.

石毛みどり・無藤隆(2006).　中学生のレジリンスとパーソナリティとの関連　パーソナリティ研究, *14*, 266-280.

石田靖彦・中村友一(2002). 中学生のいじめ体験に関する研究(2) ：「加害者」「被害者」「観衆」「傍観者」「解決者」の心理的特徴について　日本教育心理学会総会発表論文集 第44回総会発表論文集, 168.

亀田秀子・藤枝静暁・会沢信彦(2018). わが国のいじめの長期的影響に関する研究動向と展望 (2) ―いじめ被害体験が対人関係に与える影響―　文教大学教育学部紀要, *52*, 153-166.

亀田秀子・相良順子(2006).　過去のいじめ被害体験の長期的影響における男女差の検討 日本教育心理学会第48回総会発表論文集, 731.

亀田秀子・相良順子(2007). 心のしこり″として残る過去のいじめ被害体験の検討　日本教育心理学会第49回総会発表論文集, 521.

亀田秀子・相良順子(2011).　過去のいじめ体験が青年期後期においても及ぼす長期的影響-自己成長を分かつ要因の検討-　児童研究-聖徳大学児童学研究所紀要, *12*, 13-20.

金子功一(2020). 過去のいじめ体験が大学生に及ぼす影響Ⅱ-いじめ経験が友人関係と自尊感情に及ぼす影響性- 植草学園大学研究紀要, *12*, 27-35.
粕谷貴志(2017).いじめの定義の理解と求められる教育実践 奈良教育大学教職大学院研究紀要「学校教育実践研究」, *9*, 109-114.
片受靖・大貫尚子(2014). 大学生用ソーシャルサポート尺度の作成と信頼性・妥当性の検討―評価的サポートを含む多因子構造の観点から― 立正大学心理学研究報, *5*, 37-46.
香取早苗(1999). 過去のいじめ体験による心的影響と心の傷の回復方法に関する研究 カウンセリング研究, *32*, 1-13.
小早川茄捺・杉村和美・石田弓(2015). いじめられた体験を通した自己成長感を促す他者からの支援 広島大学心理学研究, *15*, 147-162.
小林桜子(2019). いじめられた体験の意味づけが自己概念に与える影響-SCAT による分析を通して- 北海道教育大学大学院教育学研究科学校臨床心理学専攻研究紀要,16,61-71.
小西淳・松尾祐作(1997). Self-Esteem と適応に関する一研究一大学生を対象として一, 福岡教育大学紀要, *46*, 243 -251.
近藤卓(2012). PTG 心的外傷後成長: トラウマを超えて 金子書房
久保田真功(2004). いじめへの対処行動の有効性に関する分析-いじめ被害者による不定的ラベル「修正」の試み- 教育社会学研究, *74*, 249-268.
Malecki, C. K., Demaray,.M.K.,& M. K., Davidson, L. M.(2008). The Relationship Among Social Support, Victimization , and Student Adjustment in a Predominantly Latino Sample Journal of School Violence, *7*, 48-71.
Matsunaga, M. (2011). Underlying Circuits of Social Support for Bullied Victims HUMAN COMMUNICATION RESARCH , *37*, 174-206.
Mimura C & Griffiths P. (2007). A Japanese version of the Rosenberg Self-Esteem Scale; Translation and equivalence assessment. J Psychosomatic Res, *62*, 589-594.
水谷聡秀・雨宮俊彦(2015). 小中高時代のいじめ経験が大学生の自尊感情と Well-Being に与える影響 教育心理学研究, *63*, 102-110.
文部科学省(2013).いじめの変遷 https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2018/03/19/1302904_001.pdf (2021 年 12 月 30 日)
文部科学省(2020). 令和２年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要 https://www.mext.go.jp/content/20201015-mext_jidou02-100002753_01.pdf (2021 年 12 月 30 日)
森本幸子(2004). 過去のいじめ体験における対処法と心的影響に関する研究 心理臨床学研究, *22*, 441-446.
森下正康 (1999) . 「学校ストレス」と「いじめ」の影響に対するソーシャル・サポートの効果 和歌山大学教育学部紀要 教育科学, *49*, 27-51.
森田洋司・清永賢二(1994). いじめ 教室の病 金子書房

中濱翔・奥村由美子・河越隼人(2021). 大学生における対人ストレス認知にもたらす影響-自己受容と他者受容の観点から- 帝塚山大学心理科学論集, *4*, 23-28.
仲埜由希子(2017). 過去の対人的経験が青年期のレジリエンスに与える影響 心理臨床研究, *8*, 25-35.
新延知美・今野裕之(2014). 自己注目が失敗からの心理的成長に与える影響-自尊感情および自己価値の随伴性を媒介として- パーソナリティ研究, *23*, 57-59.
野中公子・永田俊明(2010). 過去のいじめ体験が青年期に及ぼす影響-体験の時期と発達の関連 九州看護福祉大学紀要, *12*, 115-124.
落合良之・佐藤有耕(1996). 青年期における友達との付き合い方の発達的変化 教育心理学研究, *44*, 55-65.
岡田涼・小塩真司・茂垣まどか・脇田貴文・並川努(2015). 日本人における自尊感情の性差に関するメタ分析 パーソナリティ研究, *24*, 49-60.
岡安孝弘・高山巌(2000). 中学校におけるいじ被害者および加害者の心理的ストレス 教育心理学研究, *48*, 410 ― 421.
小塩真司・中谷素之・金子一史・長津伸治(2002). ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性-精神的回復力尺度の作成- カウンセリング研究, *35*, 57-65.
Rosenberg, M. (1965). Society and the adolescent selfimage. Prinston University Press.
Roth, D. A., Coles, M. E., & Heimberg, R. G. (2002). The relationship between memories for childhood teasing and anxiety and depression in adulthood. Anxiety Disorders, *16*, 149-164.
齊藤英俊(2016). いじめ経験時の周囲との関わりといじめ経験の長期的影響との関連性の検討 北陸学院大学短期大学部研究紀要, *9*, 23-30.
坂西友秀(1995). いじめ被害者に及ぼす長期的な影響および被害者間の自己認知と他の被害者認知の差 社会心理学研究, *11*, 105-115.
嶋信宏 (1991). 大学生のソーシャルサポートネットワークの測定に関する一研究教育心理学研究, *39*, 440-447.
高橋桂子・石井藍子(2008). 大学生活・就活活動が自己効力感に与える影響 新潟大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要 教育実践総合研究, *7*, 47-55.
高尾春香・坂中正義(2007). いじめからの回復に関する研究～そのプロセスと援助について～ 日本教育心理学会総会発表論文集第 49 回総会発表論文集, 402.
立花正一(1990).「いじめられ体験」を契機に発祥した精神障害について 精神神経学雑誌, *92*, 321-342.
Taku, K., Calhoun, L. G., Tedeschi, R. G., Gil-Rivas, V., Kilmer, R. P., & Cann, A. (2007). Examining posttraumatic growth among Japanese university students. Anxiety, Stress, & Coping, *20*, 353-367.
寺田治樹・石村郁夫(2016). 過去のいじめによる心的外傷体験と否定的認知の変容に関する調査 東京成徳大学臨床心理学研究, *16*, 181-192.

内田友宏・上埜高志(2010). Rosenberg 自尊感情尺度の信頼性および妥当性の検討-Mimura & Griffiths 訳の日本語版を用いて- 東北大学大学院教育学研究科研究年報, *58*, 257-266.

渡辺弥生(2014). 自尊感情とレジリエンスを育てる 教育と医学, *62*, 12-21.

安田奈津海・宮崎圭子(2013). クライシス・シチュエーションにおけるレジリンスと自尊感情の関連性について-いじめのクライシス・シチュエーション- 跡見学園女子大学文学部臨床心理学科紀要 *1*, 3-12.

吉川延代・今野義孝・会沢信彦(2012). 中学生におけるいじめとストレスの関連性についての研究 文教大学人間科学部紀要, *33*, 211-231.

吉川延代・今野義孝・会沢信彦(2013). 大学生における過去のいじめ経験に関する質問紙調査―いじめ経験といじめの捉え方,および自尊感情との関係― 文教大学人間科学部紀要, *35*, 155-166.